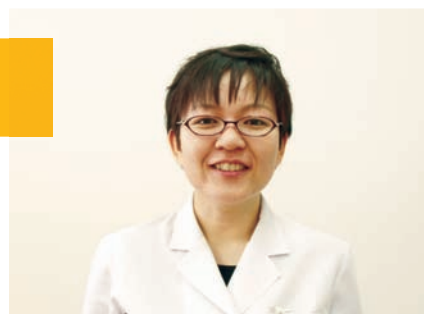


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第10回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



薬局薬剤師の本来の役割は、薬学知識を地域住民の生活に還元して薬物治療の効果をあげること。それに尽きる。たとえば、疼痛緩和は選んだ薬によっては除痛が即、現れ、患者さんの顔が苦悶の表情から笑顔になる。即時性のある治療であり、効果がわかりやすいかもしれない。

訪問業務をしていない方からはよく、たいへんな仕事、きつい仕事をがんばっているとされるが、そんなに不満は持っていない。そうした人々が知らない、“かたちの残らない報酬”をたくさんもらっている気がする。最近、それを明文化すれば、訪問業務をしたくなる仲間がもっと増えるのかもしれない、と思うようになった。

*

“かたちの残らない報酬”とは、患者さんの物語を聞くこと、感じることだ。それは、訪問業務をする者にとって珠玉の物語であり、仕事を行う意義と勇気を与えてくれる。

在宅での薬物療法を考える過程では、患者さんの背景はとても重要だ。どんな人生をすごした結果、どんな価値観の中で、どんなサイクルで生活を送っているのか、キーパーソンは誰なのか。自分の仕事をまっとうするため、患者さんや介護者と親しくなり、患者さんの背景を知っていく。その物語には、ひとつとして同じものはない。言葉だけではなく、家のおいや物の配置までもが、とても雄弁に物語を語ってくれる。

そうして患者さんの背景を知ったうえで病気をい

っしょに考え、患者さんの生活の中で実現可能な薬物療法を考えていく。認知症で一度に2週間分の薬を飲んでしまうような方については、アドヒアランス維持は諦め、コンプライアンス維持を目標に多職種と打ち合わせて薬の管理を担う。嚥下困難がひどくなっている方には、投与ルートの検討を。全症例を通して薬効評価、副作用モニタリングを担う。

*

思ったとおり成果のあがらない場合もある。コミュニケーションがうまくとれず、単に薬を持って行っているだけだと感じる日々もある。ただ諦めずに通いつづけていると、ある日パズルのピースがそろるように、なんとなく状況が改善するときがある。

下手なドラマを見るよりも、ずっと味わい深い物語をたくさん聞かせてもらう。体験させてもらう。そうすると、その患者さんやご家庭が好きになり、薬のことでできる限り役立ちたいと思う。薬の出番がなければ、それ以外でもできることはないか？そんな気持ちになる。

これが“かたちの残らない報酬”をいただいたことに対するお返しだ。

「弱っている者を助けたいという欲が生まれるのは、自分の優位性を確認したいからだ」と言われた経験がある。確かに、自分にそのあさましさが潜むことも認める。しかし、その上位の精神レベルに仁術という言葉があるそうだ。ホスピタルマインドという言葉も最近、聞き覚えた。私欲にまみれながら疑似仁術を体現していきたい。